



カラフルテックアカデミー活動報告

カラフルテックアカデミーについて

SBプレイヤーズでは、サステナビリティ活動の一環として、ICTが特に活かされる領域である「読み書きに苦手のある子どもたち」の学習支援を実施して参りました。



文部科学省が令和4年に実施した学級担任等へのアンケート調査(※1)によると、小・中学校の通常学級において、「知的発達に遅れはないものの学習面又は行動面で著しい困難を示す」児童生徒の割合は8.8%となっております。ICTはそのような児童・生徒の学習支援に役立てられています。

※1
文部科学省公表資料
[通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について \(令和4年12月13日\)](#)

オンラインセミナー

カラフルテックアカデミーは「テクノロジーの力で子どもたちの未来をカラフルに彩る」をテーマに、子どもたちや保護者の方たちに対し、読み書き支援のためのテクノロジーの活用方法をご紹介します。

読み書き



黒板を書き写すのに時間がかかる、読めるけれど読みづらいなど、読み書きの負担を軽減するためのアクセシビリティやキーボード等の活用方法を紹介。

表現



テクノロジーを活用し、作文や、発表資料などを作成。自分の考えをまとめるヒント、表現するヒントを紹介。

勉強



タブレットなどの電子機器でノートをとる、プリントに取り組みなど、学習場面に応じたテクノロジーの活用方法を紹介。

保護者



保護者様に向けたテクノロジーと向き合うためのヒントや、ご家庭でのルール作りのヒントなどを紹介。

オンラインセミナー参加者の声

カラフルテックアカデミーでは、全国どこからでもご参加いただけるよう、オンラインにてセミナーを実施いたしました。

実施回数
84回

申込数
約1,100名

※2021年度～2022年度延べ数

<参加者の声>

- ・ICTを利用することの可能性を大きさを感じました。
- ・今後合理的配慮を求めていくにあたって、ICTを段階的にどう使っていけばよいかかわかって参考になりました。
- ・参加したことで、子どもに「(手書きが困難でも)学習するためのあらゆる方法がある」ことを伝えることができ感謝しています。
- ・読み書きに困難があり、作文が苦手な子どもが、音声入力やキーボードを使って楽しそうに文章作りに取り組んでいました。そのような姿が見られたことが本当に嬉しかったです。

ICT活用事例 case 1

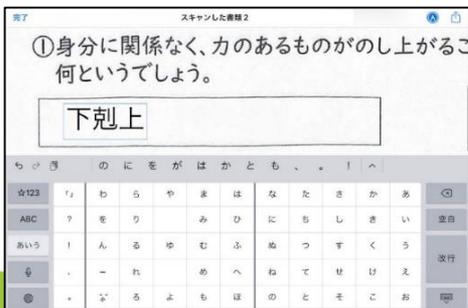
「自分のような子がいることを知ってほしい」 中学校1年生 Aさん

■ 学習における困りごと

読み書き共に困難があり、特に学校で漢字の学習が始まると鉛筆を持つことすら嫌がるようになった。検査などから形の認識、音と文字の結びつけ、アウトプットなどが難しいことなどがわかった。

■ 学習にタブレットを活用し始めたきっかけ

子どもの特性がわかり、保護者は手書き以外の方法で学習していこうと、比較的すぐに切り替えることができたが、本人は他の子どもたちと違う方法で勉強することに抵抗があるようだった。しかし、タブレットを使って「楽にできる」ことに気づくと一気に使い始め、ローマ字入力にも取り組むようになった。コロナ禍の休校中は、学校からの課題もタブレットを使って取り組んだ。



※画像はイメージです

■ 学校での利用

クラスメートには、学校に自分のタブレットを持ち込み、学習に利用することを、自分で作成した資料を使い、自分の言葉で説明している。

最初にクラスで話したのは小学生の頃だったが、「足が震えるほど緊張した」とのこと。緊張したけれど、自分で伝えた方が伝わるのではないかと思ったのだという。説明後、個別に話を聞きに来てくれるクラスメートもおり、「わかってくれない子もいるけれど、わかってくれる子もいるとわかっていく」のだという。

■ 学校での具体的な活用方法

タブレットだけではなく、拡大教科書も利用している。授業中、タブレットを使ってノートを取り、試験でも音声読み上げやキーボードを使用している。しかし、テクノロジーの活用のみにはこだわりのではなく、試験では「ルビ」による支援や「代読」等、合理的配慮について学校と相談しながらより良い方法を模索している。

■ タブレットがあってよかったこと

「ノートがとれる」こと。とるのが楽になる、ではなく、タブレットでないとノートはとれない。非常に負担がかかるし、書いた文字を自分でも読み返すことができない。タブレットで全てが解決するわけでは無いが、タブレットがあればできることがある。「自分のような子どもがいることを大人に知ってほしい」とAさんは語る。

※お話を伺った当時の状況です

ICT活用事例 case2

「テクノロジーを味方につける」

中学校3年生 Bさん

■学習における困りごと

読み書き共に困難がある。特に黒板に書かれた文字を読むことへの負担は大きく、画数の多い漢字の判読は難しい。

■学習にタブレットを活用し始めたきっかけ

小学校4年生くらいからノートがとれなくなった。いろいろな要因から学校で学習することも困難になり、放課後デイサービスや大学主催のプロジェクト等にも参加。親子でTVの発達障害や学習障害の特集を見るなど、少しずつ気持ちの折り合いをつけていった。

6年生になった頃、SBプレイヤーズの活動に参加。

■学校での学び

小学校では不登校である時期も長かったが、中学進学で環境が変わり、少しずつ登校時間が長くなっていった。中学校2年生の頃は、午前中を中学校、午後を適応指導教室で過ごすことも多かった。

中学校3年生の頃には全授業受けるようになり、試験でも良い成績を獲得している。

■学校での具体的な活用方法
タブレットとノイズキャンセリングのあるイヤホン/ヘッドホンを使用。主にタブレットを使って黒板の写真を撮り、手元で拡大しながら確認している。試験では用紙の拡大などの配慮を受けている。

全てをタブレットで補っているわけではないが、保護者からは「タブレットがあるから学校に行くことができているというのは事実です」という声があった。

■テクノロジーとの付き合い方

中学校3年生になった現在は、テクノロジーをうまく使いこなしているBさん。その他にも、漢検や英検にも合格し、勉強に対する意欲も高い。しかし、小学校の頃はタブレットを「遊び」に使うことへの誘惑も多かったらしい。そんな時保護者の方が大切にしていたのは「自己決定させる」ことだったという。

どうして勉強が必要なのか、将来どういったところで仕事をしていきたいか話すこと、また「ゲーム」に関して「悪いもの」とするのではなく「自分をリラックスさせてくれるもの」と捉え、うまく自分の味方とすることを話し合ったようだ。



※画像はイメージです